

「地(知)の拠点整備事業」
大学COC事業
PROJECT & N

私立 名古屋学院大学



＼ この方々に伺いました /

経済学部 2年 長野 智仁さん
経済学部 2年 山本 拓巳さん
現代社会学部 水野 晶夫教授
社会連携センター 杉山 晃一課長



山本 拓巳さん 長野 智仁さん

地域との連携プロジェクトのうちの1つでもある名古屋学院大学の学生が運営するまちづくりカフェ「マイルポスト」。名古屋市・日比野商店街の一角にあり、通常のカフェ運営だけでなくイベントやワークショップも頻繁に開き、まちづくりの拠点ともなっています。学生の「小さな成功体験」がさらなる意欲を生み、地域との信頼関係を築く要因になっています。

地域住民が集う“マイルポスト”

長野さん マイルポストは2002年に瀬戸市でオープンし、名古屋キャンパス開設にともなって2008年に名古屋市熱田区日比野地区へ移転しました。地域のお客さんが多く、子ども連れで来てくれたりもします。僕はカフェの仕事がしたくて参加して、今はカフェリーダーをしています。どうしたらもっとお客さんと仲良くできるかな、とか、メニューを改善できないかな、と考えています。今は生パスタのメニューが追加できたらいいな、と。地域志向科目の「減災福祉」を受講してからは、被災地についてマイルポストの活動をできないかとも考えるようになりました。高校時代は何もしていませんでしたが、大学に入ってまちづくり活動を始め、人のために何かできるようになりました。

山本さん 日比野商店街のマグロ解体ショーで販売のお手伝いをしたときにマナーが悪くすぐ怒られ、『変わろう、成長しよう』と思い、言葉遣いにも気をつけるようになりました。今では商店街の方と話すように友達に敬語を使ってしまうたりして、友達から「変わったね、周りの友達の中で一番充実してるよ」と言われるようになりました。そのときのお手伝いが楽しくて、他の商店街とも関わりたいと思ったのがマイルポスト参加のきっかけです。元々イベントの企画が好きで、8月には大学と商店街が主催する「ワクワクおやこ夏まつり」が日比野学舎であり、地域住民とのワークショップを担当しました。何をやるのか、値段設定はどうするのか、協力者を増やせないか、などの調整は難しいですが、すべてが楽しくて面白いです。毎月、商店街活性化の会議に参加してイベントなどの報告をしています。地域の人にも名前を覚えてもらいました。会議が終わったら一緒に食事に行ったりもしています。いま学舎の屋上で育てているサツマイモの関連商品をつくれなかと考えています。もちもちした食感のものを売りたいと思って、研究室で研究しているところです。

「地域の質」を高める「地」域連携・「知」識還元型まち育て事業

地域では味方になってくれる人が増えた

水野教授 マイルポストの学生は商店街活性化会議にも参加し、その話し合いの中から生まれてくる事業もあります。それをきっかけにして、減っていた商店街への加盟店が増えているんです。ステーキホルダーの方が喜んでくれるのが一番の成果。地域では味方になってくれる人が増えたと思います。ただし活動フィールドは歩いていける範囲にしています。深く関われないと単発で終わってしまうので、期待だけさせてがっかりさせてしまう。結果を出すには地域を絞らないと。
杉山課長 名古屋市は観光や福祉に関する人や団体とつなぐ役割をしてくれています。コラボも増えていて、市営バスの利用促進を調査をしている先生と、歴史観光まちづくりのプロジェクトで作ったオリジナルのアニメキャラクターを結びつける話も出ています。市は期待してくれているし、喜んでもくれます。
水野教授 学生が小さな成功体験をすると意欲的になるしアクティブになり、地域との信頼関係につながる。地域とのつながりはうまくいっていますね。

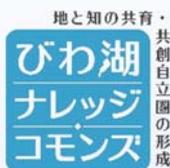
“マイスター認定制度”、“まちづくり提言コンペ”新設 カギは「小さな成功体験」

杉山課長 学生にとっては「小さな成功体験」が重要だと考え、今年からまちづくりマイスター認定制度を始めました。人材育成の観点から、そのまま地域に残ってリーダー的な立場で地域活性化に取り組んでいくことが狙いです。自分の努力が大学から認められ、それが見える形になるのは自己肯定感を高めます。称号をとった学生が地域に出て、授業ではないところで活躍しています。
水野教授 COC 事業に採択されてから地域志向科目が2倍以上に増えました。「地域商業」「歴史観光」「減災福祉」の三つの分野から、座学中心の「まちづくり学」、フィールドワークなどを含めた「まちづくり演習」の授業を新設しました。今年から全学部の1年生を対象に「まちづくり提言コンペ」も行っています。はじめはスポーツ健康学部やリハビリテーション学部など専門性のある学生に地域のことを学ばせるのはどうかという意見もありました。ですが、地域に関心を持ったり地域の人と関わったりすることは、おもてなしの心やコミュニケーション能力が伸びるなど、すべての学生に役立つことなのではないかと思っています。



水野 晶夫教授

杉山 晃一課長



公立 滋賀県立大学

＼ この方々に伺いました /

環境科学部環境生態学科 3年 山本 麻由佳さん
 環境科学部 2年 三田 綾香さん
 地域共生センター 鶴飼 修准教授
 地域共生センター 萩原 和准教授
 地域共生センター 上田 洋平助教



上田 洋平助教 萩原 和准教授 鶴飼 修准教授
 三田 綾香さん 山本 麻由佳さん

「地域に根ざし、地域に学び、地域に貢献する」という開学の理念を展開した「近江楽座」が平成16年度からスタート。現在では大学院の「近江環人地域再生学座」、学部の「近江楽士（地域学）副専攻」へと展開し、連携自治体への地域デザイン・カレッジの設置などへ発展し、大学を中心とした地域創生が展開されています。

地域志向科目で出会った地域の人と仲を深めています

山本さん 「近江楽士（地域学）副専攻」の「地域再生システム論」がとても印象的でした。大学院生も加わったグループで彦根市小野町のまちあるきをし、良いところや課題を探して解決する方法を地元の方も一緒になって考えました。今まで地域の大人の方と話す機会はありませんでした。話してみているいろいろな価値観のある人がいておもしろいと感じました。授業の後もお世話になった方と連絡をとるようになり、小野町のお米で造ったお酒のラベルデザインを採用していただいたり、お祭りへ誘っていただき、伝統芸能の太鼓を教えてもらい参加させていただくなど、普段できない経験を

することができました。地域に出ることで、色々なことに挑戦させていただいているのだと思います。

三田さん 「地域探求学」で初めて“地域人”の方（地域教育プログラムで学生の受入れや指導など、教員とともに学生の学びのプロセスをサポートし、地域側で対応頂く自治体や企業、NPO、自治会など様々な形で地域活動に取り組みされている方々）とお会いし、地域で働く方法や楽しさなど、様々なことを教えていただきました。お話しするのは最初緊張したけど優しくしてもらい、話すのがすごく楽しくなりました。印象的なことは「学生は遊んだ方がいい、何事も100点目指さなくてもそのうちの6割頑張ればいいと自分に言い聞かせることが大切」と教えてもらったことです。学校のサポートもありましたが、地域の方にアポを取り、一人で会いに行くという滅多にできない貴重な経験であったと思います。私は「近江楽士（地域学）副専攻」を4年間履修する予定なので、決められた単位を修得し「コミュニティ・ネットワーク（近江楽士）」という称号を取得することを目指しています。

びわ湖ナレッジ・コモンズー地と知の共育・共創自立圏の形成ー

“地域教育プログラム”再編 地域を元気にする変革力がある人へ

萩原准教授 COCで取り組んだのは、これまで本学が実践してきた地域と連携した教育活動を地域教育プログラムとして体系的に再構築することです。地域教育プログラムでは3つの力（コミュニケーション力、構想力、実践力）の修得を通じて、滋賀県をはじめ、地域を元気にする変革力がある人を育てることを目標としています。全学1回生の必修科目として「地域共生論」を設定し、地域に入るためのマナーを知らない学生に、コミュニケーションの取り方、コミュニケーション力を培うための授業を開講しています。この授業では約300人2クラスのアクティブラーニングを実施しています。学生のモチベーションを持続させるために、グループ替えや相互評価も実施しています。

鶴飼准教授 地域共生論では全4学部の先生方が参画する「運営委員会」を設置し、地域共生というテーマで、講義とアクティブラーニングを実施していただいています。学部ごとの得意なテーマがありますが、それを全学生が分かるような内容にアレンジしてもらい、全体でのストーリーが通るように調整しています。

上田助教 選択必修科目である「地域コミュニケーション論」は、学生に自分のこれから学んでいく動機を知ってもらい、勇気を持って地域に出てもらうためにも知事や企業の社長など実際に色々な種類の地域の人と出会い、地域の人とのお見合いをしてもらっています。そして、授業で出会った人たちとまた違う授業を通じて一緒にフィールドワークをするなど、出会いの質を深め、広げていってもらいます。これに

より、学生達は人を知り、人の生き方を知り、自分の将来や仕事のことも話すようになります。

大学院での人材育成が学部の地域教育のサポートに

鶴飼准教授 大学院生と社会人が受講する「近江環人地域再生学座」という、まちづくりに関するノウハウを身につけるコースが大学院にあります。修了後は「コミュニティ・アーキテクト（近江環人）」の称号が大学から付与されます。学部の授業「近江楽士（地域学）副専攻」では、地域に学生が出るプログラムをいくつか設けていますが、その受け皿の中心となるのは“近江環人”の社会人であり、仲介や窓口になってくれています。大学院での人材育成が学部の地域教育のサポートに繋がっています。平成27年1月現在、近江環人の称号授与者は96名でそのうちの約半数が滋賀県内の各地で活動しています。県内どこのエリアでも学生が地域に出る活動の相談や教育の手伝いを依頼することができます。

上田助教 近江環人の社会人は地域教育の資産です。近江環人地域再生学座では、社会人が大学院生と一緒に机を並べることで知識を付けるだけでなく、大学生の動かし方や教育、教員の得意分野など大学を活用するリテラシーをもっていたり、卒業後は“近江環人”として地域に入っていく意味「内通者」となり、大学が地域に入っていくときの「翻訳者」となってくださいます。そんなパートナーがだんだん増えてきました。また、学生のことを理解してもらい、労力をかけて一緒に育っていくようにし、そこで育った人材を大学も地域も社会全体で享受することを理解して付き合ってくさっている方には“地域人”になっていただいています。

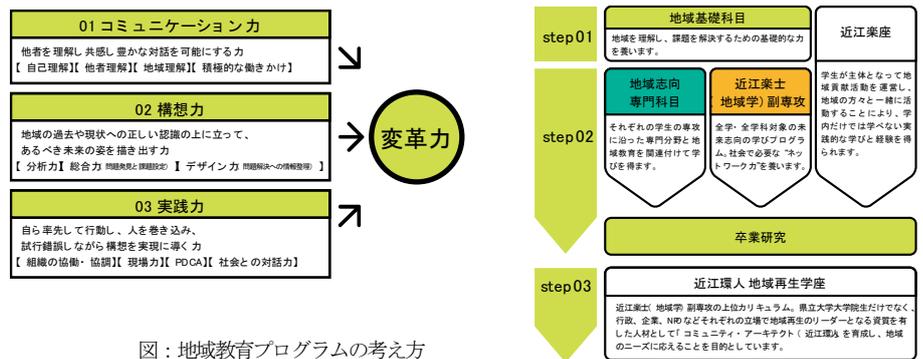
滋賀県立大学 地(知)の拠点整備事業

「びわ湖ナレッジ・コモンズ—地と知の共育・共創自立圏の形成」

教育面での取組みについて

取組みの目的

経済、社会、環境の大きな変化の中にあつて、これからの時代に生きる若い世代には、これまでの仕組みの延長線上に自らの能力を磨くだけでなく、変化する時代を生き抜き、持続可能な社会の創造を担う能力と資質を養うことが求められている。滋賀県立大学では、この課題に応える未来志向の変革力を身につけた人材を育成するため、2015年度から教育カリキュラムを大幅に改め、専門性を身につけ、俯瞰的に物事を見る能力を養うことに加えて、現実に生起する諸問題に創造的に取組み、変革する能力と態度を養うために、新たに地域教育プログラムを整備・体系化した。



工夫/改善点

図：地域教育プログラムの考え方

① 変革力醸成のためのステップ

地域教育プログラムは、各学部学科の学びの中で、無理なく学ぶ事ができるよう既存科目を再編し、新たな科目を創設した。専門的な学びにおいても「地域」を志向した科目(地域志向専門科目)が配置され、自らの専門と社会や地域とのつながりについて考察を深めることができる。同プログラムでの学びと各学部学科の専門科目における学びの相乗効果で、専門的な能力と共に、コミュニケーション力、構想力、実践力に基づく変革力が身につく工夫を施した。

② 地域のサポーターによる学びの支援

様々な分野の教員と先輩、学びを応援してくれる地域のサポーターが連携して学びの場を提供する取組みは旧カリキュラムでもすでに実践していた。今回の再編では、その伝統をさらに強めるべく、多くの地域の人びとを教室に招き、また逆に地域に出向いて、生の地域課題や地域の魅力に触れ、対話やグループワークを実践する。こうしてアタマとカラダとココロを動かす「アクティブラーニング」により、生きた知と実践力を身につけていくことを目指している。

取組みの具体的事例/今後の展開

地域教育プログラムの中でも、地域共生論は、全学必修科目で1年次から配当されている。2015年4月よりスタートした同授業は、月曜日の1時限(人間文化学部、人間看護学部)、2時限(環境科学部、工学部)に分かれて、1コマ約300名で展開される授業として運営された。全国的に見ても、こうした大教室(本学では交流センターホール)を使用したアクティブラーニングは珍しい取組みである。入学初年時から地域志向な取組みに興味を持ち、その後の学びにつながるべく、教職員、教育補助を担う地域教育学生サポーターが協力しながら、授業企画運営を実践している。今後、こうしたノウハウは地域教育FDとして還元していく。



写真：地域共生論の授業風景(交流センターホールを使用した300人規模によるアクティブラーニングの実践)

名古屋学院大学 (愛知県名古屋市・瀬戸市)

「地域の質」を高める「地」域連携・「知」識還元型まち育て事業

—COC教育における特徴的な取組の紹介—

▽本学COC事業の目的

地域活力を取り戻し、持続性の高い地域をつくること、換言すれば「地域の質」の向上を図ることを目的としています。これを3つのまちづくり(地域商業・歴史観光・減災福祉)の側面からアプローチします。

▽地域の課題に対応できる人材育成目標

高いコミュニケーション能力を有し、社会の課題を主体的に発見・解決できる、地域を愛する良き市民、良き職業人の育成を目指しています。

カリキュラムの特徴

学年進行に合わせた学生・教員全員参加型の教育イベントと、現場重視の調査・分析・提案を行う課題解決型授業(PBL)、また学部の特設科目で地域の課題を学ぶ地域志向型科目を組み合わせる「段階発展型カリキュラム」を構築し、1年生から4年生まで一貫して地域を学べる教育システムを整えています。

3つのまちづくり

地域の活力を牽引する
地域商業まちづくり

歴史を継承し観光を育む
歴史観光まちづくり

暮らしの基盤を底上げする
減災福祉まちづくり

段階発展型カリキュラム

学年	カリキュラム内容	
3~4年	④教育イベント 「地域フォーラム」	①まちづくり提言コンペ (下記事例紹介で説明) ②課題解決型授業(PBL) NGU教養スタンダード科目として、全学共通科目にCOC関連の7科目を新設(26年度より) ・地域商業まちづくり学/地域商業まちづくり演習 ・歴史観光まちづくり学/歴史観光まちづくり演習 ・減災福祉まちづくり学/減災福祉まちづくり演習 ・上級まちづくり演習 ③地域志向型科目 各学部の専門科目に地域を学ぶ内容を加える。 ④地域フォーラム 3・4年生のゼミ・演習で学んだ内容を地域へ還元する。(全学生・教員参加型教育イベント)
1~4年	②課題解決型授業(PBL) ③地域志向型科目	
1年	①教育イベント 「まちづくり提言コンペ」	

より多くの学生にCOC教育へ参加を促す工夫

COC教育・事例①「まちづくり提言コンペ」

新入生向けの地域導入教育を重視しています。まず、全学部1年生必修科目「基礎セミナー」の共通テキストにおいて、キャンパス周辺の地域課題を学びます。その後、自分が考える課題解決法をA4サイズ1枚の提言用紙にまとめ提出。最終的には行政が優秀提言を選出し、表彰します。2015年度は全8学部の1年生1,500名中951名(63.4%)の参加がありました。今後は、参加率を高めることで、地域を愛し、主体的に課題解決へ取り組む学生のすそ野を広げていきます。



COC教育・事例②「まちづくりマイスター制度」

COC事業として新設した「課題解決型授業」において、資格認定制度を実施しています。多くの学生が参加しやすいように「初級」「上級」の2段階に分けています。「初級」では、3つのまちづくり分野別2科目(座学/演習)の単位取得により認定。「上級」は、上級演習や外部資格の取得等と、難易度を高めています。今年度、初めて認定式を行い、31名の初級まちづくりマイスターが誕生。学長から認定証を手渡すことにより、学生の満足度・向学心も高まりました。





ひろみらプロジェクト
HIROMIRA PROJECT

私立 広島修道大学

＼ この方々に伺いました /

人間環境学部人間環境学科 2年 沖尾 祥之さん

学部経営学科 1年 五十嵐 紗月さん

広島修道大学 副学長/ひろしま未来協創センター長 人文学部 山川 肖美教授

ひろしま未来協創センター次長 法学部 森河 亮教授

ひろしま未来協創センター 人間環境学部 木原 一郎講師

ひろしま未来協創センター 種田 朗事務部長



沖尾 祥之さん



五十嵐 紗月さん

広島修道大学の「ひろみらプロジェクト (ひろしま未来協創プロジェクト)」は、学生の教育、教員の研究を地域課題の解決につなげ、地域活性化をはかる取り組みです。「イノベーションスキル」こそが社会に出たあとの武器になるとして、力を入れています。

大切な基礎の部分がつまった地域志向科目

沖尾さん 昨年受講した「ひろしま未来協創特講」が印象に残っています。自分の名刺をつくったり、キャッチコピーをつけたポスターをつくって地域の人にPR したりというもので、情報を整理する力、発信する力を磨きました。今年は廿日市の中山間地域にある廃校を舞台に、過疎地域をどう盛り上げていくかを考えました。他にも廿日市のジャム屋さんがブランド化したいという思いがあってそこに協力したり、人間環境学部三浦ゼミの皆さんが商品化した地元の人が飲んでいた野草茶の発信に協力したり、園芸で有名だった町だけその力も弱まってきている西広島で由緒ある園芸屋さんに協力してもらって盆栽を若い人にアピールしたりしました。

いろいろ失敗もあって、魅力を見つける力や気づく力をもっとつけなきゃと思いました。大切な基礎の部分がつまった講義だったと思います。自分が行きたい地域へ実際に話をしに行くという経験をして、地域の人との距離が近くなった気がします。今、学部の授業で中山間地域の獣害問題や里山の荒廃といった問題について学んでいます。地域イノベーションコースで知った廿日市もそうといった問題に悩んでいるので、学部で学んだものを活かしてその解決に関わっていただけたらと思います。

五十嵐さん 「地域イノベーション論」の授業では「ファシリテーターとは何か」を考えています。コミュニケーションやファシリテーションの能力が身につく、街を歩いても「これはイノベーションかも」「次のレポートに使えるな」と思うことをメモするようになり、アンテナが高くなったように思います。来年からのゼミでは企業分析の授業があり、いま興味があるLCCについて研究したいと思っています。今は下積み。2年生になって早く地域に出たいです。

イノベーション・ブリッジによるひろしま未来協創プロジェクト

“地域イノベーションコース”新設 教育を受ける立場から学びをつくる立場へ

山川教授 昨年度から始まった「地域イノベーションコース」は、教育を受ける立場から自分たちが学びをつくる立場へと移行するような設定にしています。先生方がどういった教育を提供するのも大事だけど、それを学生たちが自分たちでどういう風に学びとして落とし込めるかのほうがより大事。学生になぜこのコースをとったのかというアンケートをとったときに、「仕事に活かしたい」というのが一番多かった。何も武器がない状況で働くよりも、イノベーションスキルを持ったほうがいいという意識があるのではないのでしょうか。

木原講師 だいたい平均で20~30人の学生が、週末に日帰りでフィールドに出ます。地域で選ぶ学生もいれば、暮らしのイノベーション、交流のイノベーション、街区のイノベーションといった各自自治体ごとに掲げたテーマ性で選んでくる学生もいます。事前にテーマを理解して入ってきてくれるので、こちらとしては講義を進めやすいです。活動が少しずつ認知されてきて、関わってみたいという声の外からかかるようになりました。広がっていると実感しています。

地域と一緒に学生をあたたく育てていく

森河教授 技術を持たない文系で、なかなかうまく地域課題解決はできないかもしれませんが、一緒にあたたく育てていってくださるかとお伺いして、それでもいいと手を挙げてくれるところと関係づくりをしています。課題解決の進め方も学生のスピードを考慮していただいています。対等な立場で関わっていくことが大切です。

木原講師 地域に対しては「学生は入れ替わります」という説明をしています。そして学生は手伝いにきているわけではなく、地域の方々が自分で続けていかなければいけないということをご理解いただけるようにしています。ですので学生がいない間に話が進んでいることもあり、それに学生が一生懸命ついていかなければならないときもあります。地域の方から提案をいただくこともあるようです。



ひろしま未来協創センターの皆様

教育

 地域イノベーションコース <http://www.hiromira.jp/project/2/>

地域イノベーションコース

開設：2014 年度より

コース登録学生数：425 名（1 年生、2 年生）

コース専用開講科目数：18 科目

ひろみらプロジェクトにおける教育の支柱は地域イノベーションコースです。2014 年度に新設された全学横断型の本コースには、1 学年で約 3 割の学生が自ら希望して学んでいます。1 年目にキャンパスで学んだ学生の多くが、2 年目となる今春より、学んだ成果を還元すべく地域へ飛び込んでいます。1 年目の終盤には、授業外でも学びたい・地域貢献したいという学生もみられるように、そうした学生の学習意欲に応えるために授業外の取り組みも、授業と連動させながら展開しています。

2016 年度

イノベーション・プロジェクト I・II（各 2 単位）

サービスラーニングの手法を用いた授業を 2016 年度開講予定。学生が自主的に地域の魅力や課題と向き合い、地域イノベーションを起こします。

2015 年度

ひろしま未来協創プロジェクト（2 単位）

PBL 型授業として、2015 年度開講。座学で学んだことを生かしながら、連携地域で地域イノベーションに関する知識やスキルを修得します。



山田 詩乃（商学部商学科 2 年）

私は北広島町の大朝へ行き、PBL の活動で主に前期はヒヤリング、後期は空き家をリノベーションする活動をしました。実際に自分たちのアイデアが形になるプロセスに参画し、喜びと同時に現実性を考えるときの難しさを実感しました。

PBL・サービスラーニング



廿日市 北広島 広島市



研究

 ひろみらシンクタンク <http://www.hiromira.jp/project/think/>

 ひろみら研究領域 <http://www.hiromira.jp/project/inv/>

多様な共有の機会の創出

シンクタンク登録研究者：38 名

ひろみら研究領域：8 件

包括連携協定：18 件

研究面では「ひろみらシンクタンク」と「ひろみら研究領域」が特徴的です。シンクタンクの登録研究者（本学専任教員）は全学部にわたり 38 名体制で、地域や自治体、産業界からの相談件数は 100 件近くになりました。地域活性化を志向したひろみら研究領域では共同研究 3 件、個人研究 5 件が蓄積され、先般『ひろみら論集』として発刊することができました。こうした地域志向の教育・研究が進展していく中で、地域からの期待は顕現化し、包括連携協定の数は 13 から 18 に増えました。地域に関わってくださる方々の数や意識も着実に変わってきています。

ひろみら FES で発表



ひろみらプロジェクト 1 年間の成果報告会「ひろみら FES」では、3 回目の今回は次のような「ひろみら研究領域」の発表を行います。

- (1) 広島県の産業に関するイノベーション・インデックスの構築と適用
- (2) 空間デザインとプロセスデザイン、その相乗効果
- (3) 地域活性化のためのコミュニティにおける ICT 活用について
- (4) 郊外型住宅団地と商店街の連帯性向上による

“住み続けられる・住みたくなる”まちづくり

「ひろみら論集」発刊



『ひろみら論集』は、全学部を対象に「地域課題解決や地域活性化に関する研究の成果を広く社会に公表するとともに、内外の研究交流を図ること」を目的として 2015 年 12 月に創刊しました。創刊号は 6 編の研究論文を掲載していますが、これからも「地域課題から社会的価値を生み続ける研究」を社会に還元します。



森河 亮（法学部 教授）

東日本大震災現地ボランティア活動を学びのプログラムとするための検証を行った結果、体験学習サイクルを元に目標設定を含む事前研修・実社会へ応用することを意識した事後研修を行うことが有用であることが示唆されました。

総括

広島修道大学「イノベーション・ブリッジによるひろしま未来協創プロジェクト（ひろみらプロジェクト）」が「地（知）の拠点整備事業（COC）」に採択をされて、今年度で 3 年目を迎えます。いずれも、地域の知と大学の知が循環をし始め、協働で知識基盤社会の創造と地域イノベーション人材の育成が進めている証左と信じています。

ひろしま未来協創センター長 山川肖美

しまいたいCOC 国立 島根大学

＼ この方々に伺いました /

法文学部法経学科 4年 新藤 正春さん
 生物資源科学部農林生産学科 3年 川本 裕哉さん
 総合理工学部物質科学科 2年 篠崎 真碩さん
 地域未来戦略センター長 生物資源科学部 松崎 貴教授
 地域未来戦略センター COC事業部門長 高須 佳奈講師
 地域未来戦略センター COC事業部門 中野 洋平助教



新藤 正春さん 川本 裕哉さん 篠崎 真碩さん

地域と協働して地域の課題解決を一緒に行うプロジェクトであるJR西日本米子支社と連携した山陰未来ドラフト会議に参加し、学生たちに色々な人との協働の中で自分の力を発揮してもらえよう、新たな挑戦をもらっています。今後PBL科目として開設する予定です。

地域と協働して生まれたもの

新藤さん 所属している新聞部のご縁からプロジェクトに参加し、松江市島根町の公民館長や地域の方にお話を聞きながら、島根町の資源を使い産業を復活させて地域を盛り上げようという地域活性化プランを企画しました。地域の方にわざわざ時間をとっていただいたのに思うようにいかず困ったこともありましたが、とても勉強になり、新鮮でした。色々プランを考えていく中で地域の方50人程に集まってもらいワークショップを行いました。プラン発表会にも地域の方が見に来てくださって、「よかったです」と言っていただけで、良い関係が作れたなと思っています。

川本さん 元々地域に眠っている資源を、地域を盛り上げるために活かすことに興味があり、先生に誘われてプロジェ

クトに関わりははじめました。島根町の資源について知ることができ、実際にかつて使われていた油桐を用いて企画できたことが自分にとって大きかったです。最初は都会の方がいいなと住んでいて思っていたのですが、のんびりしてる地方の方が楽しいなと気づき、もっと地域の人と話してみたいな、地域に入ってみたいと思うようになりました。
篠崎さん 私も入学当時『なんでこんなに田舎なんだろう』と地元との違いに戸惑っていましたが、でも地域志向科目の「中山間地域フィールド演習」で雲南市役所の方々と出会い『活性化していきたい、地域を良くしていきたい』という気持ちを身近で感じることができました。地域の方の影響を受け、自分の住んでいるところにもっと目を向けなくてはと思うようになりました。プロジェクトには、地域に目を向けることで今までに経験したことがないことができるのではと参加しました。地域の方と話し合う場では、経験量や知識量が不足していて、自分が役に立っているのかわからないときもありましたが、今では地域についての知識が付き、それを踏まえて考えることができるようになり、自分にも何かできることはないかと探すようになってきました。

課題解決型教育 (PBL) による地域協創型人材養成

地域貢献人材育成入試・COC人材育成コース新設 全学部地域志向へ

高須講師 各学部にも所属しながら「COC人材育成コース」で学ぶ学生を選抜する地域貢献人材育成入試を始め、来年度から入学生を受け入れます。地域課題に対応するためには、一つの分野の知識だけではうまくいきません。学部を越えた色々な人との協働の中で自分の力を発揮してもらえよう、コース独自の教育環境を構築しています。この入試の特徴は、出願「する」「しない」に関わらず、出願前から「面談会」を通じて高校生を育成する「育成型」の入試であるという点です。この面談会では、本学職員が高校生と一対一で向き合い、地域課題について考えていることや、将来どのように社会に貢献したいのかを対話することで高校生の意欲を高め、今すべきことを明確にしていこうとするものです。

松崎教授 結果的に面談会は高校生にとってすごく評判良かったと聞いています。自分はどこでどういうことをやりたいのか決まらなかったけれど、話している中で少し整理されて固まったというケースがいくつもあつたそうです。地域の方からも高い期待を寄せていただいています。地域活動を特定の学部、特定の人だけがやっていたらいいのではなく、大学全体をあげてやっていかないといけない、という意識が広まってきました。毎年その意識は変化し、少しずつ皆さんに理解していただいて、協力が得られやすくなってきています。

中野助教 大学における地域志向教育は、既存の教養科目を地域志向科目として整理するだけでは不十分だと思います。本学では、専門科目にまで踏み込み、自身の専門性を地域課題にどのように対応させるかを学ぶキャップストーン科目の設置、開発を行っています。さらにそこへ向けて地域の基礎知識を学ぶベースストーン科目を教養・専門双方で整備しています。

学際的研究者クラスター「プロジェクトセンター」

高須講師 COC事業はプロジェクトセンターを軸にしながら研究を進めています。学際的に研究者をクラスター化することと、地域課題に対して私たちができるソリューションを探していくというものになっています。現時点では15のセンターがあり、最初は8のセンターだったものからCOC事業申請時以降増えています。中でも、くにびきジオパークプロジェクトセンター、自然災害軽減プロジェクトセンター、農林水産業の六次産業化プロジェクトセンターについては、地域とワーキンググループをつくり、連携自治体とともに事業を進めています。取組みが経年的に進んでおり、成果が出てきています。



中野 洋平助教 高須 佳奈講師

松崎 貴教授

事業理念

教育面では、これまでも行ってきた地域志向教育の可視化と更なる強化を図り、実際に地域に出向き、地域の課題や資源を発見し、その課題を解決できる地域貢献人材の養成を行います。また、研究面では学部を超えた研究組織であるプロジェクトセンターの機能を強化し、地域と連携しながら課題解決に繋がる研究を行い、その成果を地域に還元するとともに、特別副専攻プログラム等により地域貢献人材養成に活用します。

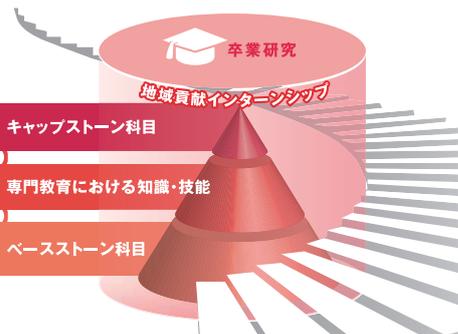
【教育】 地域志向教育の強化

平成 26 年度から、学士課程の教養育成科目と専門教育科目を対象に、キャップストーン (CS) 科目・ベースストーン (BS) 科目という観点から地域志向教育の見直しを行いました。これは「学部学科で得た専門知識や技能を地域課題の解決に応用できる人材の育成」を目標に、専門教育と地域志向教育の有機的連携を促進するための取組です。

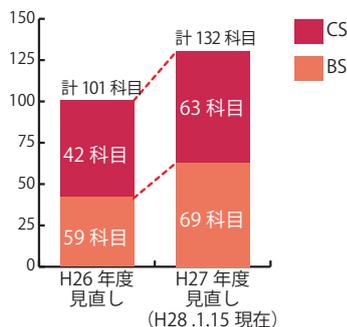
このような地域志向教育科目の可視化に加え、学生対象の授業アンケートをもとに、その内容の改善にも取り組んでいます。

CS 科目：各学部の専門教育科目のうち、身に付けた知識と経験を地域課題解決能力の修得につなげる科目

BS 科目：教養育成科目又は各学部の専門教育科目のうち、地域の基礎的な現状と課題について学習することのできる科目であり、かつ、地域社会との関わりを通じて、大学で専門領域を学ぶことへの意欲を喚起できる科目



地域志向科目数の推移



地域志向科目の内容改善

・「島根学」の例（後期開講教養育成科目、受講者数 200 超）

H26	外部講師中心のオムニバス形式
H27	ベースストーン科目の中心科目として再定位。内容も「島根の地域資源」「島根の地域課題」「地域課題と向き合う」という3部構成とし、学内外から専門家を講師として招いた。加えて、大教室対応のアクティブラーニングを導入。



講師の講義後、ワークシートを用いたグループディスカッションに取り組む。

【研究】 地域課題に対応したプロジェクトセンターの強化

PBL の協働開発

＜CS 科目：地域課題解決プロジェクト＞
疾病予知予防プロジェクトセンターでは、予防技術の開発・移転を進め、地域医療や地域活性化に貢献しています。また H28 年度の実施を目指して、地域未来戦略センターと協働し、島根県大田市における健康増進対策をテーマに地域課題対応型の PBL を開発しています。



H27 年度地域共創型 PBL 試行の様子。松江市島根町の中学生・住民とワークショップを開催。

地域課題解決への取組

＜山陰防災フォーラムを開催＞
自然災害軽減プロジェクトセンターでは、山陰地域を対象とした自然災害の防止及び軽減のためのプラットフォームを地域社会に提供するため、「山陰防災フォーラム」を組織しました。産学官連携で春・秋に講演会を開催しています。



H27 年 10/17 に開催の山陰防災フォーラム講演会後の現地見学会。大田市多伎地区。

研究成果の教育還元

＜特別副専攻プログラムの設置＞
Ruby・OSS プロジェクトセンターでは、情報経済・産業に関する知識技能を有した人材の育成を目的として、松江発祥のプログラム言語 Ruby を体系的に学ぶことができる「特別副専攻 Ruby・OSS 履修プログラム」を、H27 年度より開設しました。



H26 年度の取組みの様子。フィールドワークでオープンデータを収集・活用する授業科目も含まれる。



佐賀大学・西九州大学
コミュニティ・キャンパス佐賀

国立 佐賀大学

西九州大学共同事業

＼ この方々に伺いました /

理工学部都市工学科 4年 住田 裕美さん

理工学部都市工学科 4年 増森 遥香さん

経済学部経済学科 3年 金沢 昂紀さん

経済学部経済学科 3年 尾崎 北斗さん

地域創生推進センター 副センター長/COC+事業実施代表 五十嵐 勉教授

大学COC事業実施代表 三島 伸雄教授

大学COC事業 コミュニティ・キャンパス佐賀 三島 舞コーディネーター



尾崎 北斗さん 金沢 昂紀さん

住田 裕美さん 増森 遥香さん

学生たちは地域の問題を自らの問題、社会全体の問題として認識し、当事者意識を持って取り組んでいます。大学は企画力・実践力を有する専門職業人を養い、今後はインターンシップも強化していく予定です。

地域志向科目をきっかけに自分の行動が変わった

住田さん 地域志向科目「建築・都市デザイン特別講義（環アジア国際セミナー）」で、重要伝統的建造物群保存地区に認定される鹿島市肥前浜宿について歴史等を学び、最後に各学生グループが考案した建築デザイン案を地域の方にプレゼンテーションしました。以来、鹿島市の古いまち並みを守りつつ、どう活性化するかについて考えるようになり、卒論で題材にしました。地域に通うことで少しずつ地域の方に顔を覚えてもらい、訪ねて行くと必ずお茶を出していただける場所もでき、地域で活動しているNPOから、調査に協力してもらいたいと依頼もありました。1年では不十分と感じたので、大学院へ進学し、これからさらに研究をしながら地域に密着し続ける予定です。鹿島市に関わっていなければ地域の抱える問題に向き合えていなかっただろうし、職業の選択肢が増えていなかったと思います。

増森さん 「建築・都市デザイン特別講義（まちなか再生プロジェクト）」で佐賀市のイルミネーションイベント「サガ・ライトファンタジー」に関わることができました。以前は佐賀市内を歩くことすらあまりなかったのですが、受講後は佐賀市が実施しているエリアマネジメント協議会（佐賀市中心部まちづくりに関する協議会）に参加するようになりました。企業や自治自治体の方も多く参加されています。来年

度もライトファンタジーに参加して、協議会で学んだことを活かしていきたいと思います。

尾崎さん 佐賀大学に入学するまでは佐賀県は「何もない」というイメージを持っていました。ですが地域連携や経済政策の授業を通し、地域の方とFace to Faceで話して、佐賀は住環境もいいし、食べ物もおいしく、今では佐賀を好きになりました。また、今までは授業を受けてそのままにしていたものを、地域志向科目「演習（3年）」を受講してから実際に行動に移そうと思うようになりました。ゼミでフットパスを活用した地域活性化のため、コースづくりをしているなかで、熊本県に視察に行き、もっと他県のフットパスについて知りたいと思うようになりました。実家に帰省したときには近隣でフットパスに取り組んでいる団体に連絡をとるなど積極的に動き、自分の知らない自分に気づくことができました。

金沢さん 地域志向科目は、改めて佐賀のことについて調べ、佐賀の良さや誇りに気づくという部分で役立っていると感じます。当初は地域に関わろうという意識はなかったのですが、学んでいくうちに自分なりの課題意識が見えてきて、自分が積んできた経験や知識をどう活用できるのかを考えるようになりました。さらに発展して「県のトップは一体どのようなことをしているのだろう」と思い、県庁のインターンシップに行きました。地域志向科目を受講することで県内就職につながったり、大学卒業後の仕事に生きるはず。培った郷土愛が、学生を佐賀にとどまらせることに寄与しているのではないかなと思います。

コミュニティ・キャンパス佐賀アクティベーション・プロジェクト

学生の成長を測るため、ラーニング・ポートフォリオを義務化

五十嵐教授 大学COC事業の取り組み以降、主体的に活動する学生が増えたと思います。以前から学生や教員が地域に入ってはいましたが、それらはイベントの手伝いや研究の一環として一時的なものでした。今は年間を通じて地域に入っているのが、地域との関りは深くなっています。学生の成長を測るためには、ラーニング・ポートフォリオを義務化し、学生に自身の活動を自己評価・自己確認させます。「社会人基礎力調査」によっても客観的評価を行います。また、COC+では地元就職率の向上のため、地元で働くためのキャリア教育を行う必要があります。具体的にはインターンシップ強化を図っていきます。また、地元企業と大学生のマッチングはまだまだ大きな課題があり、改善する必要があります。

今後COC事業を続けていく上で必要なこと

五十嵐教授 今年度、嬉野市で新しく地域活性化事業を行った方は、大学と一緒に活動できたことに対して非常に感謝されました。涙を流しながらありがとうと言ってもらえました。こうしたことをしっかり形にする意味でも、地域住民の方に対するアンケートを実施した方が良いと思います。お世話になった地域に対して戸別訪問でインタビューを行い、定性的なデータとして収集していきたいと思っています。今後も大学と地域が連携を行っていく上では、間に立つ人、コーディネートできる人が重要です。それは、大学側にも必要ですし、地域側にも必要です。元地域おこし協力隊で現在は役所にお勤めの方が、地域側の調整を行っていただいたおかげでスムーズに連携できた例もあります。

プロジェクトA

学生参画による調査・交流・活動を通じた地域創成プログラム



【プロジェクトの目的】

「中心市街地の活性化」や「離島・山間地域の活性化」「地域コミュニティの再生」を目的に、全学教育機構における教養教育改革の一環として行う。教養教育のインターフェース「地域・佐賀学コース」の「地域創成学プログラム」を基盤に、「文化と共生コース」、「生活と科学コース」、「短期留学生プログラム」との連携によって地域活性化を目指す。

【具体的取り組み事例と成果】

事例 地域活性化拠点「豊ふぁー夢」プロデュース

嬉野市塩田町の元牛舎を改築し、地域活性化の拠点として活用しようと活動を始めた「豊ふぁー夢」の企画・運営を支援。今年度は、オーナーの卯津江豊彦さんを中心に、インターフェース科目「地域創成学Ⅰ・Ⅱ」を受講する学生と地域の方々が協力して地域活性化イベントを開催。今後も、学生や地域と協働し、その活用方法の検討やイベントの企画等を行う予定。

成果

- ・ 地域活性化イベントの企画・運営を通して「地域創成」について学ぶことができた。
- ・ 実際に地域と関わることで、地域課題について触れることができた。



5/23 (土) 現地視察及び今後の施設活用・活性化を検討。

7/4 (土) 施設の見学と活用のため大掃除を実施。

10/17 (土) 11月開催予定の地域活性化イベントの打ち合わせ。

11/15 (日) イベントに向け、看板作成や屋外スペース活用のためのテーブル作成、竹を使った器づくりなどを行った。

11/28 (土)～29 (日) 28 (土) 午前中から、学生が制作した屋外用テーブルや看板の設置など会場準備や当日の打ち合わせを実施。29 (日) イベント開催。

プロジェクトB

地域空間再生デザイン・プログラム

【プロジェクトの目的】

景観や街並み整備等、地域再生において重要な「地域デザイン」に取り組む。特に地域の空間分析と将来像をわかりやすく伝えられるよう、対象地の空間的特質や課題を捉えた計画設計、及びデジタルデザインへの展開ができる人材（デザインクリエイター）を育成する。

【具体的取り組み事例と成果】

事例 「環アジア国際セミナー（日本・韓国・タイ）」

佐賀県鹿島市の重要伝統的建造物群保存地区「肥前浜宿」に、日本・韓国・タイで建築・都市デザインを学ぶ学生が集い、「グローバル社会における文化多様性と歴史的環境の保全活用」をテーマに、市民・学生・専門家が各国の事例を学び議論するとともに、「肥前浜宿」を対象に地域の文化多様性を鑑みつつ、歴史的環境に配慮しながら肥前浜宿へのゲートのあり方について提案を行う。

成果

- ・ 学生提案発表及びシンポジウムでは、専門家だけでなく地域住民を交えた議論を行うことで、地域課題の理解のために必要な作業を具体的に実践して学習することができた。
- ・ 現地で提案発表を行うことで成果を地域に還元することができた。
- ・ 観光資源活用に向けた地域密着型の国際交流を図ることができた。



開催期間：平成27年7月30日（木）～8月3日（月） 4泊5日

開催地：佐賀県鹿島市肥前浜宿

参加大学：佐賀大学、タマサート大学（タイ）、チェンマイ大学（タイ）、韓国交通大学校（韓国）

参加人数：65名

プログラム：

1日目 現地オリエンテーション、対象地案内

2日目 対象地調査、グループワーク1（視点の整理）

講義「日本の都市と建築」、「肥前浜宿の課題について」

3日目 中間発表

ディスカッション、グループワーク2（提案物の作成）

4日目 最終発表（発表10分質疑5分）

パワーポイント10枚程度及び（図中心）及び模型

5日目 現地出発・解散



私立 西九州大学

この方々に伺いました /

佐賀大学共同事業

健康栄養学部健康栄養学科 3年 新垣 琴木さん

健康栄養学部健康栄養学科 3年 半田 香さん

西九州大学 副学長/地域連携センター 井本 浩之センター長

健康栄養学部健康栄養学科 児島 百合子助教

地域連携センター 中島 哲男事務長

地域連携センター COC事業 土橋 真奈美コーディネーター

地域連携センター COC事業 徳安 優一コーディネーター



新垣 琴木さん



半田 香さん

“明日は檜の大木になろう”そんな想いをこめた「あすなろう体験」。専門分野にとらわれない体験型学習を通して、檜の大木のように大地にしっかりと根を張り、高い志を持って未来という天空に向かって真っ直ぐに伸びていってもらえるよう、新しい社会人としての資質を養っています。

社会人基礎能力が身につく地域志向科目「あすなろう体験」

半田さん 1年生のときに受講した「あすなろう体験Ⅰ」は、自分たちでボランティア活動に応募し参加する授業なのですが、私が初めて応募したボランティアは1型糖尿病患者のためのサマーキャンプのスタッフでした。キャンプ前には糖尿病について詳しく知るための勉強会があったのですが、血糖値検査、インスリン注射(注射中身は水を入れてあるもの)を自分で行うもので、小さな子供たちはこれを毎日自分でしていると習い、早い段階で学校の授業よりも詳しく糖尿病について学ぶことが出来ました。準備が多く大変なこともありましたが、小さな子供たちとの交流も楽しく、自分たちが考えたイ

ベントの達成感などがありとても充実したキャンプになりました。このボランティア活動で一緒になった同じ学科の子と仲良くなり、今受講している「あすなろう体験Ⅲ」もその時の友達の勧めで参加し、あすなろう体験で友達の幅を広げることも出来ました。

新垣さん 「あすなろう体験Ⅲ」で本村製菓さんから菓子製造ラインを活用してお菓子開発の依頼がありました。本村製菓さんと協議し、佐賀県発信の新しい焼き菓子を開発することにしました。生産者さんやデザイン会社さんにも加わっていただき、“チームMOCHIMUGI”を結成し一緒に商品化について話し合いをして、試作品が完成しました。学内での試食アンケート調査をし、商品を完成させ、3月に販売する予定です。この体験では、「協調性」「課題発見力」「日程調整の重要性」の三点が大切だと感じました。自分のチーム内だけではなく他のチームとも協力し合い、反省会を行い課題分析を行えました。将来は食品会社で開発を担当したいと思い授業に参加しましたが、難しさを学ぶことができ、就職に対して真剣に向き合えるようになりました。

コミュニティ・キャンパス佐賀アクティベーション・プロジェクト

COCで進化する「あすなろう体験」

井本センター長 本学は学部の構成から専門職へ就職する学生が多かったのですが、最近は銀行や一般企業などバリエーションが豊かになりました。これまでは無かったことで、私も驚いています。求人を行っていない東京のベンチャー企業を訪問し、就職を決めてきた学生もいます。あすなろう体験を1年生のときから受けているおかげではないでしょうか。あすなろう体験は平成23年からスタートしましたが、平成22年までと全く状況が変わりました。それまでは教員は委員会等の出席等で地域とかかわることが主だったのですが、“子育て支援に関するノウハウはないか”など実践的な相談が来るようになり、地域のイベントにもかなりの学生が行っている、うちの大学がなくなったら県内の多くのイベントにかなりの支障が生じるのではと自負しています。あすなろう体験Ⅱ、Ⅲは当初参加人数が少なかったのですが、COCで専門教育科目を増やした結果、今年専門教育科目でも700名近くが参加しています。



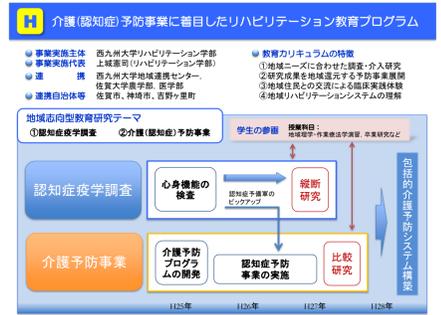
能力観点別評価の導入

井本センター長 地域の方々からいただく温かい声をどう実質的な成果に結びつけていくかが今後実現すべき課題の1つです。また、学生の学修成果をどのように評価すべきか、という課題もあり、能力観点別評価を含んだシラバスの作成をするため、OECD(経済協力開発機構)のコンピテンシーにそって作り直し、それぞれの科目が能力観点別にどういった資質能力をのぼすのかを明確にしてもらいました。また、能力観点別に学生が何点かを数値化してわかるようにし、科目分野ごとで分析することが可能になり、地域志向型の授業科目で学生自身がどのような能力伸展を実現できたかを目に見える形で確認できるようになりました。地域に出かけてサポートしたぐらいでは、地域に対する成果を可視化できません。最初は学生が来てくれたことだけで感謝されますが、徐々に要求が上がっていき、3年すれば学生は何もしてくれないとの批判に変化しています。そこで学生がこれだけ成長したということを数値で示すことが出来れば、地域の皆さんのおかげで成長したというのを見せていけます。目標を明確に設定し、それを実現するための方法論をたて、実際に活動に従事し、成果物を作成し、十分な振り返りを行い、それらの過程を一定の評価指標によって客観評価するような仕組みを組み合わせたいと考えています。

プロジェクトの目的

本プロジェクトでは、認知症予備軍とされる「軽度認知障害の人」に焦点をあてた包括的介護予防システムを構築し、地域ニーズに応えられる高度な保健医療福祉専門職の養成を目指しています。

具体的な内容は、佐賀市、神崎市、吉野ヶ里町、小城市等の自治体と協力し、地域住民を対象とした心身機能検査を学生と共に実施します。その検査で「軽度認知障害の人」が確認できた場合、当事者およびご家族に対して生活上のアドバイスをしたいと考えております。また、介護(認知症)の予防に対する独自のプログラムを自治体、学生と共に作成し、佐賀らしい予防教室の企画・運営をしていきたいと思っています。



認知症疫学調査

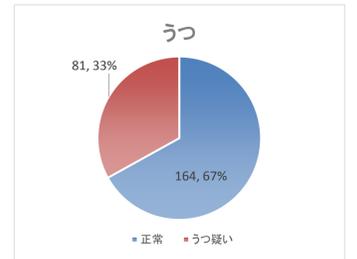
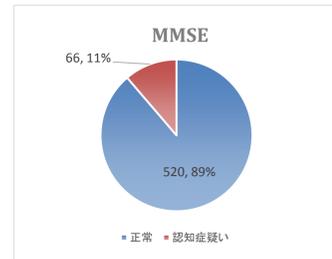
● 地域貢献

認知症疫学調査では「体力測定」と称して、筋力やバランスなどの身体機能評価に加え、もの忘れや注意機能の精神機能の検査を並行して行います。

佐賀市、神崎市、吉野ヶ里町、小城市、伊万里市にて、**地域在住高齢者586名の心身機能調査を実施しました。調査の結果、認知症疑い54名(11%)を、早期発見することができました。**測定後、結果を自治体にフィードバックし、自治体から当事者に対して、受診のうながし等の対応が実施されました。

一方、**うつに関しては、245名に調査を行い、うつ86名(うつ傾向81名、うつ状態5名)(35%)を早期発見しました。**うつはもの忘れに比べ、高い傾向であることがわかりました。

2013年度より「認知症推進5カ年計画(オレンジプラン)」が開始され、専門医の育成など、早期診断に向けた取り組みが現在進行しています。しかしながら、兆候発見から受診までの期間が平均約9ヶ月半かかるとの報告もあり、今回のこの取り組みが、認知症早期発見システム確立の一助になればと思います。



● 学生教育、研究実績

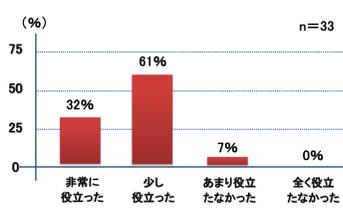
【学生教育】地域作業療法学、地域作業療法学演習、生活環境論、卒業研究、特別研究(大学院)等の科目にて、延べ285名の学生に対する学外活動を実施しました。

4年生の長期実習後のアンケートでは、**93%の学生が「学外活動が実習に役立った」と**回答しました。また、**学外活動の多い学生は学外活動の少ない学生と比べ、実習の満足度や実習中の社会的態度の評価が高い傾向**であることがわかりました。

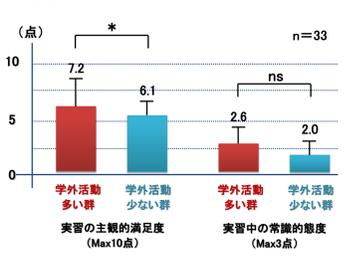
【研究実績】本プロジェクトにかかわる教員による**26年度教員研究論文数37本、学会発表21本**など。

● 実習後学生アンケート

この4年間で学外活動(研究や卒業論などの体力測定)は、臨床実習の役に立ちましたか?



● 実習後学生アンケート



卒業研究がんばってます!

私は西九州大学 作業療法学専攻の山下真実と申します。本プログラムに参画し、その調査結果をもとに卒業研究を行っています。研究題目は、地域在住高齢者の「棒取りテスト」と心身機能との関連性としています。地域在住高齢者52名に対して、「棒取りテスト」を実施したところ、認知機能(もの忘れの程度)や注意機能が低い人ほどこの「棒取りテスト」の速度が遅い傾向であることがわかりました。今後は転倒との関連性について調査を行う予定です。



あることがわかりました。今後は転倒との関連性について調査を行う予定です。

←夏休みにゼミ交流のため県立広島大学を訪問しました。



● 方法

対象	棒取り(時間)	棒取り(時間)	上肢テスト
年齢	0.525**	0.440**	0.023
握力	-0.016	0.071	0.444**
重心動揺(閉眼)	0.152	0.211	0.019
重心動揺(開眼)	0.089	0.047	-0.073
老若式	-0.489**	-0.460**	-0.135
ロコモ	-0.561**	-0.421**	-0.201
MMSE	-0.634**	-0.546**	-0.099
TMT	0.531**	0.484**	0.251

** : p<0.01 * : p<0.05

● 棒取りテストと各測定値間の単相関分析 n=52

	棒取り(閉眼)	棒取り(開眼)	上肢テスト
年齢	0.525**	0.440**	0.023
握力	-0.016	0.071	0.444**
重心動揺(閉眼)	0.152	0.211	0.019
重心動揺(開眼)	0.089	0.047	-0.073
老若式	-0.489**	-0.460**	-0.135
ロコモ	-0.561**	-0.421**	-0.201
MMSE	-0.634**	-0.546**	-0.099
TMT	0.531**	0.484**	0.251

** : p<0.01 * : p<0.05

介護(認知症)予防事業(佐賀らしい予防教室の企画・運営)

● 吉野ヶ里式プログラム

佐賀らしい予防教室を実践するために、吉野ヶ里社会福祉協議会の皆様の協力のもと、認知機能をフル活用するプログラムを実施中です。頭を使いながら運動や活動を行うと、本当に疲れるみたいですが、皆さん楽しみながら一生懸命参加して頂いております。来年にはこの成果がお伝えできると思います。期待してください。

● 介入プログラム(一日)の流れ

時間	内容
9:00	到着、バイタルチェック
9:30~10:00	準備体操 (ラジオ体操・椅子体操・拮抗体操・その他)
10:00~11:00	①マシーントレーニング ②健康意識向上プログラム ③身体機能の維持・向上プログラム グループに分かれて順番に実施する
11:00~11:30	またぎマス運動
11:30~12:00	昼食
13:00~	日替わりプログラム(午後) ・外出、スポーツ吹き矢、マージャンなど



セラバンド筋トレ



二重課題歩行



マージャン



ふまねっと